

小麦新品種「きぬあずま」の栽培法と目標生育量

福島県農業試験場種芸部・相馬支場

平成12・13年度福島県農業試験場試験成績概要

分類コード 02-02-04131527

部門名 普通畑作物—小麦—生理・生態品種—施肥法—栽植様式—栽植密度—品質・食味

担当者 二瓶直登・半沢伸治・丹治克男

I 新技術の解説

1 要旨

- (1) 「きぬあずま」の播種適期は10月下旬、播種量は0.8 kg/aである(図1)。
- (2) 安定多収となる成熟期の生育目標は、稈長:85~90 cm、穂数:550~650 本/m²、生育量(稈長×穂数):470×102~600×102である。穂数700 本/m²以上では倒伏の危険性が高まる(図2)。
- (3) 成熟期の生育目標を達するための生育期の生育量は以下のとおり(表1)。
ア 越冬前(12月中旬)
草丈:13.5~15.0 cm、茎数:550~650 本/m²、草丈×茎数:75×102~100×102。
イ 幼穂形成期(3月上旬)
草丈:16.0~18.5 cm、茎数:950~1300 本/m²、草丈×茎数:150×102~240×102。
- (4) 安定した収量を得るため、幼穂形成期追肥を実施し穂数増を図る(図3)。
- (5) 出穂期の止葉葉色値が38以下の場合A粉蛋白含量は8 %以下となるため、出穂期追肥(窒素0.3kg/a)を施用しA粉蛋白含量を高める。このとき粉色への影響は見られない(図3, 4)。

2 期待される効果

- (1) 「きぬあずま」の適正な播種期・播種量を明らかにした。また成熟期の目標生育量とその目標生育量を達するための生育期の生育量を明らかにし、「きぬあずま」の良質安定栽培が可能となる。
- (2) 適正な施肥管理による収量・品質の高位安定化が図られる。

3 適用範囲

福島県中通り及び浜通りを対象とする。

4 普及上の留意点

- (1) 播種法はドリル播とする。
- (2) 幼穂形成期追肥、出穂期追肥にはそれぞれ窒素成分0.3kg/a施用する。

II 具体的データ等

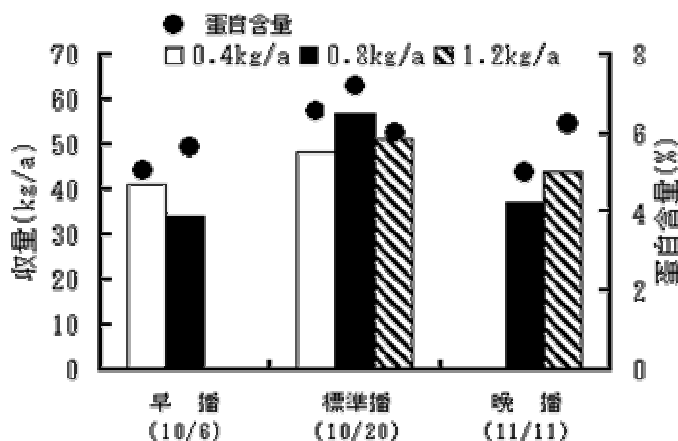


図1 播種期・播種量と収量・蛋白含量
(2000年、福島農試)

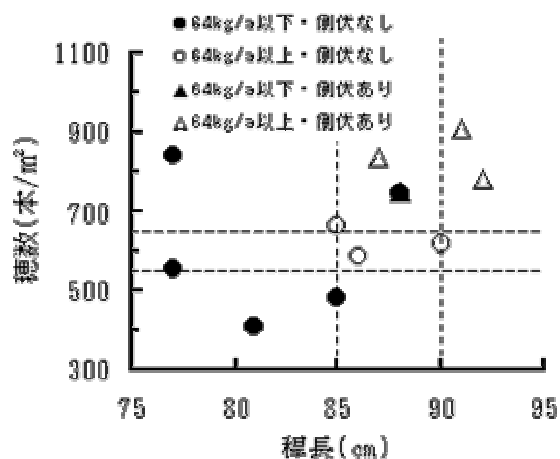


図2 稲長・穂数と収量・倒伏の関係
(1995～2000年、福島農試・相馬支場)

表1. 生育間の相関係数と各時期の生育 (1998～2000年、本場・相馬支場)

		成熟期		回帰式	目標
		稲長 (cm)	穂数 (本/㎡) [稲長×穂数]		
越冬前	草丈 (cm)	0.88**		$y=2.1x+48.8$	13.5～15.0cm
	穂数 (本/㎡)		0.91**	$y=1.1x-21.4$	550～650本/㎡
	生育量 [草丈×穂数]			$y=5.5x+6400$	7500～10000
幼穂形成期	草丈 (cm)	0.82**		$y=1.6x+59.4$	16.0～18.5cm
	穂数 (本/㎡)		0.69**	$y=0.3x+280$	950～1300本/㎡
	生育量 [草丈×穂数]			$y=1.7x+21000$	15000～24000

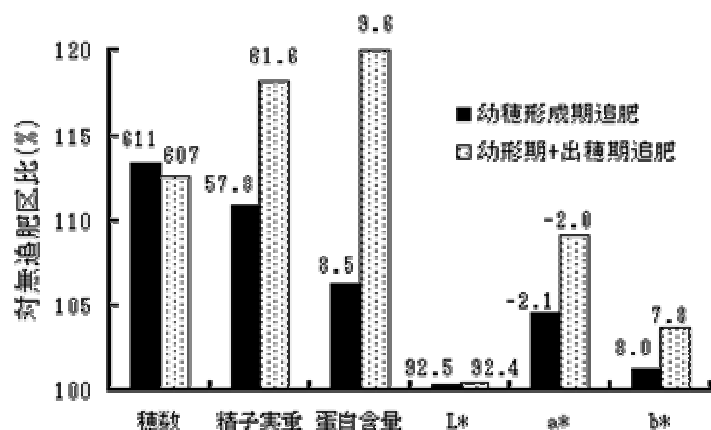


図3 時期別の追肥の効果
(1999～2000年、福島農試・相馬支場)

注) L*:明るさ、a*:+赤み・-緑み、b*:+黄色み・-青み
数字は各項目の実数

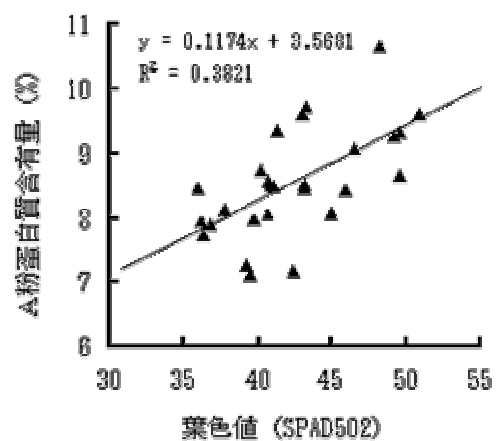


図4 出穂期における止葉の葉色とA粉蛋白質含有量の関係
(1999～2001年、福島農試・相馬支場)

Ⅲ その他

1 執筆者名

二瓶直登、半沢伸治、丹治克男、木田義信

2 その他の資料等

なし